

令和 4 年度 大学活性化経費 事業成果報告書

事業区分 (2) グローバル化に対応した人材育成に関する事業
(6) その他、大学の活性化に貢献する取り組み

申請組織 キャリア育成センター

申請組織長 役職名 キャリア育成センター長 氏名 吉田 あけみ

統括責任者 役職名 国際コミュニケーション学部 氏名 水島 和則

課題名 SUGIYAMA エアラインシンポジウム ―キャリアとしての航空業界を考える―

	役割	氏名	所属・役職名	役割分担
事業組織	統括責任	水島 和則	国際コミュニケーション学部	企画・運営マネジメント
		渡部 眞也	キャリア支援課長	企画補佐
		尾内 里江	事務職員	企画補佐
		押元 翔馬	事務職員	企画補佐

1. 事業開始の背景・経緯や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

キャビンアテンダント (CA)、グラウンドスタッフ (GS) 等として現役で活躍している本学卒業生を大学へ迎えて在大学生との交流を図ることにより CA、GS 等を目指す学生の航空業界・職業への理解を深めることを目的とする。

併設校 (高校・中学) の在校生を招待することにより、本学の卒業生の活躍を直接確認してもらうことができる機会となる。

2. 事業方法 (特色・独創性) 等 (300 字程度で記述)

このシンポジウムでは、現役で活躍している卒業生を招き、各々の主な業務だけでなく、1 日・1 か月のスケジュールを紹介してもらうなど、人事担当者からの企業説明では確認をすることが難しい、より具体的な業務についての理解を深めることができることが特色。また、シンポジストが本学の卒業生であることから、在大学生にとっては親近感があり、安心して話を聞くことができる。

本シンポジウムには、当該年度の内定者が参加することにより、卒業生と在大学生のつながりを強くすることが期待できる。

また、併設校 (椋山女学園高等学校・椋山女学園中学校) も対象とすることにより本学卒業生の活躍を直接見てもらうことができ、広報としての効果も期待できる。

3. 事業の成果 (600字～800字程度で記述)

エアラインシンポジウム出席者のアンケートより、すべての回答者から参考になったという回答を得られた。「大変参考になった」81.3%、「参考になった」18.8%。自由記述欄では、「私は、CAさんは身長が高くないとダメ。英検が準1級以上。これが最低限の条件だと思っていました。そこで、発表者の方が自己紹介の時に151cmで小柄です。と仰っており、本当に驚きました。」といった回答があった。

この結果から、本事業の目的であるCAやGS等を目指す学生の航空業界・職業への理解を深めることができた。

また、「今まで正直揺らいでたところもあったけど今日のシンポジウムで本格的にエアライン業界を目指そうと思う。」「これまで会社情報を得る方法として会社のホームページやSNSを利用していましたが、本日のエアラインシンポジウムでは実際に働いている方々、そして椋山の卒業生の方々から生の声を聞くことができたということで大変参考になり、貴重な機会となりました。」というコメントがあり、参加者の就職活動へのモチベーション向上やキャリア意識の醸成にも繋がったと考えられる。さらに今年度も、前年度に引き続き司会進行を有志の学生が行うなど、シンポジウム運営の一端を担うことにより、学生の社会人基礎力醸成にも寄与している。

シンポジウム後には卒業生と学生の交流があり、卒業生と在学生のつながりを強くするという目的を達成できた。また、本学への入学を検討している高校2年生1名の参加もあった。

出席者 在学生 29名、高校生 1名、教職員 6名
卒業生ほか（登壇者5名含む） 11名

計46名

4. キーワード (本事業のキーワードを1つ以上8つ以内で記載)

①航空業界理解	②職業理解	③卒業生在校生の繋がり	④キャリア意識醸成
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 事業の達成状況及び今後の課題 (事業の達成状況を踏まえて、課題、反省点、及び今後の取組みを具体的に記載すること。)

今年度は、コロナ禍により中止されていた航空業界の採用が徐々に再開している。現職にとっては忙しいなか、5社より卒業生に協力していただくことができた。コロナ禍からようやく抜けた中での開催であったが、航空業界の現状を知ることは航空業界も含めた今後の自身のキャリアを考えるために有効であることが、アンケート結果から分かった。次年度以降も、社会情勢や業界動向にあわせたプログラムを構築していく。

来場者数は46名で昨年度65名より19名下回る結果となった。しかし、航空業界への就職を目指す学生が少なからずいること、その学生たちのモチベーション向上につながったことは間違いない。

本プログラムは必ずしも航空業界を志していない学生に対しても、社会人としての仕事への姿勢を学ぶことに有効であることから、より多くの学生に参加してもらえよう来場者数の増加を図りたい。